

《学会参加記》

逆風のなかの「寛容」
——第 53 回ドイツ・ユグノー大会参加記

林 祐一郎

はじめに

2025 年 1 月頃のある日、研究室の筆者の机に例のごとくバート・カールスハーフェンのドイツ・ユグノー協会（DHG）から郵送物が届いていた。そこには、同年 6 月に開かれる第 53 回ドイツ・ユグノー大会への招待状が同封されていた。信仰や家系を通じてフランス改革派教会に所縁のある人々がドイツ語圏から集う、隔年開催の祭典である。DHG の前身ドイツ・ユグノー協会（DHV）が中断を挟みつつ開催していた総会も計算に加えるなら、135 年の歴史を持つ催しであると言える¹。筆者は 2023 年 1 月頃より DHG へ入会し、同年 7 月に南独バイロイトで開かれた前回大会にも参加したことがあった。今回は筆者の慣れ親しんだベルリンが開催地ということで、文献調査と合わせ、喜び勇んで馳せ参じた。



画像①大会初日のフランス大聖堂（2025 年 6 月 13 日筆者撮影）

この大会は、最新の学術成果を報告・議論する「研究集会」というより、信仰難民ユグノーをめぐる協会・教会内外の交流と理解を促進する文化祭である。もちろん、歴史学の専門家による講演が盛り込まれ、系譜学研究の議論もなされるが、それらは上記の趣旨に従属したかたちで行われている。そのため、共同体の紐帯や記憶といったものを冷めた目で観察していた場合、違和感を覚えなくもないだろう。だが筆者からすれば、近世の宗派对立や大亡

¹ DHG の歴史については拙稿を参照。林祐一郎「前世紀転換期ドイツにおけるユグノーの末裔による歴史記述—歴史家アンリ・トランとドイツ・ユグノー協会—」『史林』106(2), 2023 年、76-111 頁。

命という歴史の「後生 *Nachleben*」を現場で体験しうる貴重な機会だった。

他方、少数派集団への「寛容 *Toleranz*」を称揚すべき今大会は、長年ドイツ政府が進めてきた「寛容」な移民・難民政策や社会保障政策に逆風が吹くなかで開催された。過去十年間、周辺諸国でも移民・難民への規制強化は広く見られたが、2025 年 2 月 23 日の連邦議会選挙では政権与党で中道左派のドイツ社会民主党 (SPD) が後退し、より強力な移入規制と自国優先を主張する急進右派の「ドイツのための選択肢」(AfD) が第二党へ躍進した。第一党は中道右派のキリスト教民主／社会同盟 (CDU/CSU) となったが、単独での議席数は三割程度である。新政権は急進右派を許容しない「防火壁 *Brandmauer*」の死守という合意の下、第三党に転落した SPD と連立を組んで辛うじて過半数を保った²。

こうしてドイツ・ユグノー大会は、国内で広く共有されていると考えられてきた社会的合意が、以前にも増して大きな挑戦を受けるなか、6 月 13～15 日に渦中のベルリンで開催されたのである。以下、三日間にわたる同会の概要を、筆者の所見も交えながら紹介する。

一日目

(1) 開場 (16:00～)

大都市ベルリンの中心部、ハウスフォークタイ広場 *Hausvogteiplatz* で地下鉄を降り、地上から注ぐ光を追いながら階段を上って、そのまま地上を西へ進んでいくと、きわめて開放的な、しかし整然として壮麗な広場が見えてくる。最近改装を終えたばかりのそのジャンダルメンマルクト *Gendarmenmarkt* には、向かって真ん中にベルリン音楽堂 *Konzerthalle Berlin*、ドイツ大聖堂 *Deutscher Dom* とフランス大聖堂 *Französischer Dom* が左右に立っている。18 世紀にユグノーたちのために建てられたフランス大聖堂には、展望塔と博物館、そして文書室もある。大会は、大聖堂の西側に接続したフランス・フリードリヒシュタット教会 *Französische Friedrichstadtkirche* の大会堂で行われることになっていた。

² 新たな連邦宰相フリードリヒ・メルツ (1955-, CDU) はいわゆる「保守本流」のカトリックであり、2005～2021 年に長期政権を築き上げ、難民の受け入れを進めたプロテスタントのアンゲラ・メルケル (1954-, CDU) とは同世代ながら対照的である。経済面ではリベラル、文化面では保守的な傾向を見せ、英語を流暢に話し、欧州協調を支持するものの、移民・難民規制や社会保障見直しという点では AfD と共通するところも多い。支持基盤も安泰ではなく、5 月 6 日の宰相選出投票では造反が起こり、通例ならば儀礼的行事に過ぎないはずの投票がやり直されるという異例の事態となった。“Kanzlerwahl: Friedrich Merz mit 325 Stimmen zum Bundeskanzler gewählt“, in: *Deutscher Bundestag*, 06.05.2025, <https://www.bundestag.de/dokumente/textarchiv/2025/kw19-de-kanzlerwahl-1062470>, aufgerufen am 10.04.2026.



画像②大会時に講壇として使用された大会堂の説教壇（2025年6月13日筆者撮影）

前日までバート・カールスハーフェンのドイツ・ユグノー協会図書室を訪れていた筆者が、ベルリンでの宿泊先に荷物を置いて、会場のフランス・フリードリヒシュタット教会の大会堂へ入ったのは、16時過ぎ頃だった。会場はすでに行程表通り16時頃に開かれており、来客用の珈琲や紅茶、そして菓子類も用意されていた。DHG会長を務めるツェレの改革派神学者アンドレアス・フリック博士 Dr. Andreas Flick とその配偶者の方や、現地フランス改革派教会関係者の顔触れも拝見できた。会場は筆者が長期滞在時に何度も日曜礼拝へ通った場所でもあったので見慣れていたが、内装は改革派らしく比較的質素なもので、ベルリンの爽やかな夏の明るさに似合わぬ薄暗さが宗教的な静謐を醸し出していた。しかし、人々はみな打ち解けたような雰囲気であり、筆者も関係者たちとの再会を楽しんだ。

（2）開会（17:00～）

ほぼ定刻通りに大会は始まった。フリック会長や現地教会牧師の方々による司会の下、会場が位置するベルリン・ミッテの区長としてシュテファニー・レムリンガー氏 Frau Stefanie Remlinger（緑の党 Die Grünen）に開会の辞が委ねられた³。彼女は、17世紀にブランデンブルク、特にベルリンへ移住したユグノーたちの重要性を称え、このように述べた。

ユグノーたちはお金のない大衆ではなく、大抵が高度な技能を持つ職人・商人・起業家たちでした。カルヴァン主義の影響を受け、勤勉で革新的な、起業家精神にあふれた

³ 緑の党は、同年春まで SPD と連立を組んでおり、環境・経済・社会の持続可能性を重視する若者や学生に人気の政党である。しかし、新宰相とは政策的・思想的に距離があり、CDU が必要とする過半数には SPD との連立で足りたため下野していた。

人々だったのです。⁴

国際都市ベルリンの中心部で区長を任された政治家らしく、彼女は現代的な移民・難民問題を想起させる内容で開会を宣言したのである。そして、司会から今後の行程などについてお知らせがあった後、休憩を挟んで 18 時頃から第一講演へ移ることとなる。

(3) 第一講演 (18:00～)

第一講演で登壇したのは、地元ブランデンブルク州西部のレックアーン博物館群 Reckahner Museen で館長を務めるジルケ・ジープレヒト＝グラービヒ博士 Frau Dr. Silke Siebrecht-Grabig である。題目は「シュゼット・アンリ——芸術家にしてアカデミー会員というホドヴィエツキの娘 Suzette Henry – Chodowieckis Tochter als Künstlerin und Akademiemitglied」。啓蒙期プロイセンに生きたユグノー女性の生涯がテーマだった⁵。

ここで講演の全容について詳しく論じることはできない。ただし、その力点はシュゼットが啓蒙全盛期ベルリンの子であること、彼女が自分自身の優れた画力で道を切り開いて女性初のプロイセン芸術アカデミー会員になったこと、自身の内外に様々な限界はありながらも絵画を通じて新しい生活像や道徳観を表現しようとしたことにあった⁶。

(4) 晩餐会 (19:15～)

晩餐会は、通例フランス語礼拝が実施される地下の小会堂「ジョルジュ・カサリスの間 George Casalis Saal」で行われた⁷。現地教会関係者たちの尽力で縦長の机が数列並べられ、食事がビュッフェ形式で提供された。酒類は、ユグノーの故郷フランスや亡命先の一つだった南アフリカからのワインが用意された。食前のお祈りをした後、我々は歓談しながら空腹を満たした。しばらくすると、私が前回のバイロイト大会で知り合った老婦人方二人組が前回大会と同じくヴァルド派の衣装に着替えて現れ、晩餐会場の一部で記念撮影が始まった。

⁴ ベルリン・ユグノー博物館公式フェイスブックによる 2025 年 6 月 13 日の投稿でも、同じ文言が区長の言葉として公開されている。原文は以下の通り。“Die Hugenotten waren keine mittellosen Massen, sondern meist hochqualifizierte Handwerker, Händler, Unternehmer. Calvinistisch geprägt, leistungsbereit, innovativ - Menschen mit Unternehmergeist”. <https://www.facebook.com/HuMuBerlin/posts/569715782858745/>, aufgerufen am 10.04.2026.

⁵ その父で普領ダンツィヒ（現波領グダニスク）出身のダニエル・ホドヴィエツキ Daniel Chodowiecki (1726-1801) は、父方がポーランド系、母方がユグノー系という「多民族国家プロイセン」を象徴する人物で、「大王」として有名なプロイセン王フリードリヒ 2 世（在位 1740-1786）の穏やかで親しみやすい「老フリッツ Alter Fritz」像を作り上げた銅版画家としても知られる。ホドヴィエツキは、教会文書室の前任者ロベルト・ヴィオレ氏 Herr Robert Violet が研究対象として取り組んだ人物でもある。Robert Violet, *Daniel Chodowiecki. Eine verschollen geglaubte Autobiographie*, Verlag der Deutschen Hugenotten-Gesellschaft: Bad Karlshafen 2010. シュゼットの母ジャンヌ・バレー Jeanne Barez (1728-1785) も、ベルリンのフランス人コロニーに住むユグノー家系の出身だった。シュゼットはプロイセン王室から図書館長や美術室長として重用されることになるベルリンのユグノー系牧師ジャン・アンリ Jean Henry (1761-1831) と結婚して、夫の姓を名乗ることになったのだった。

⁶ 講演後には、大会堂内の受付窓口の前にドイツ・ユグノー協会から出版された著作や冊子、またベルリンやブランデンブルクの教会史にかんする古本などが並べられ、希望者は廉価で購入できるようになっていた。そこで番をしていた老年男性の方は自身がベルリン都心部から南へ 18 キロメートルほど離れた村落グロースツィーテン Großziethen に定着したユグノーの子孫であることを嬉しそうに語ってくれ、自分の祖先が決して裕福な人々ではなかったこと、亡命当時の農村部では外国人に対する反感が強かったことなども教えてくれた。

⁷ この教会では、大抵毎週日曜午前には大会堂でドイツ語礼拝、小会堂でフランス語礼拝が行われ、毎月第二日曜日のみ両者の合同礼拝が実施されている。https://www.franzoesische-kirche.de/en/node/51?field_tax_event=10, aufgerufen am 10.04.2026.

逆風の中の「寛容」

人々は21時以降も会場に残っていたが、翌日の行程は朝9時から始まるということもあり、筆者は22時頃までに宿泊先へ戻った。

二日目前半

(1) 会員総会 (09:00～)

二日目最初の催しは大会堂での会員総会である。これは前回大会も同様だった。筆者も会員として参加した。総会は祈りによって始まる。まずフリック会長が大会参加者たちに対して挨拶し、筆者が最も遠くからやってきた参加者として紹介された。今回、ドイツ語圏以外からの参加者は筆者を除いてほぼ皆無だったものの、前回同様、オーストリアから来られているザルツブルガー⁸の子孫の方なども参加されているという。次いで前回大会から今次大会へ至るまでの会計報告とその監査・承認、規約の一部変更にかんする議論、協会を運営する新役員会陣容の発表と承認がなされた⁹。

10 時頃には総会が祈りをもって終わり、筆者が外に出ると、大会堂北西側に並ぶ涼しげ



画像③BVGによって手配された古風な観光バス（2025年6月14日閲覧確認）

な木々の向こうのフリードリヒ通りに、薄黄色の古風な二階建てのバスが二台待っているのが見えた。ベルリン交通局（BVG）が手配したものらしい。次の行程は遠足である。

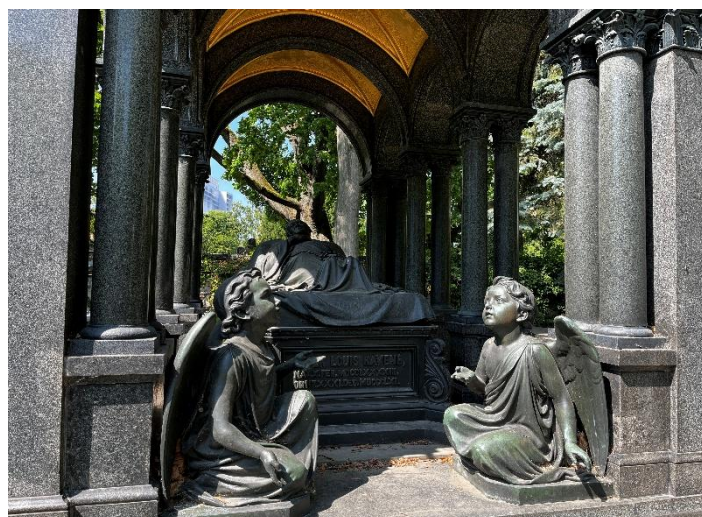
(2) 遠足 (10:30～)

⁸ 18世紀にハプスブルク君主国支配下からプロイセンへ移住してきたプロテスタントのこと。

⁹ 総会での議論について詳しく述べることはできないが、論議の的は会員の高齢化への対処やデジタル化のさらなる推進などだった。これは何も DHG 特有の問題ではなく、世界中の様々なキリスト教会、そして我々のあいだでも取沙汰されていることである。

遠足の目的地は二択だった。一方は、数年前にフランス改革派教会墓地の保全が地域の政治問題となったベルリン市内北部パンコウ区の旧入植地フランツェーグ・ブーフホルツ *Französisch Buchholz* を訪問し、保全活動を行っている郷土史家の方からお話を聞きつつ現地を見学するというものである。他方は、中心部から数キロ北へ離れた場所にあるベルリンのフランス改革派教会墓地二つを訪れ、歴史的に著名なユグノー系の人物の墓がある箇所にも案内してもらえるというものである。前者は2023年にフリードリヒシュタット教会の方々と一緒に遠足で行ったことがあり、同じ郷土史家の方のお話も聞いていたので、この二年でどれくらい状況が変わったのかお聞きしたいところでもあったが、一人ではなかなか見つけづらいかもしれない有名人の墓へ確実に導いてもらえる後者を、筆者は選択していた。こうして筆者は10時過ぎ頃には後者のレトロバスへ乗り、晴天の下で前景がよく見える二階前方三列目右側の席を確保した¹⁰。

我々は人々の往来で賑わうフリードリヒ通りを北上し、11時前にはショセー通り *Chauseestraße* とティーク通り *Tieckstraße* が接するところに面した第一墓地へ到着した。一見して緑豊かな公園にしか思われない道を進んでいくと、19世紀の鉄鋼商人ルイ・ラヴネ



画像④鉄鋼商人ルイ・ラヴネの霊廟（2025年6月14日筆者撮影）

Louis Ravené (1823-1879) の頭像と霊廟へ案内された。商いで財を成し、貴族の娘と結婚して、地域経済の発展に貢献した地元名士の記念碑である。ルートヴィヒ・ドヴリャン *Ludwig Devrient* (旧名 ルイ・ド・ヴィリャン *Louis de Vrient*, 1784-1832) という舞台俳優の大きな墓石も見せてもらった。この墓地には先述の銅版画家ホドヴィエツキの墓碑もあった。最低限整えられた生い茂る草花を前にして、楕円盤形の石にただ氏名と生没年だけが描かれた彼の墓には、個人的に好感を覚えた。さらに、犬や馬の絵で知られる画家カール・シュテフェック *Carl Steffeck* (1818-1890)、ボヘミア出身の音楽家フランツ・ベンデル *Franz Bendel*

¹⁰ 前方には先述の老婦人方二人組もお乗りになっていたが、偶然私の後ろに座られた方は、第二次世界大戦以前の東部領土、すなわち現在ポーランドやロシアなどの領土となっている旧東プロイセンなどの地域から追放されたドイツ系の人々の歴史について研究している民間団体の方だった。教会関係者だけでなく、こうした大学外部の郷土史家たちも DHG の活動に関心を持っているのである。

逆風の中の「寛容」

(1833-1874)、1939年に生まれた朝鮮系と思しき工学博士など、ユグノーとは直接関係のなさそうな人物の墓もあった。間接的に何らかの関係があったのかもしれないが、いずれにしても立地の良い綺麗な場所であるために、様々な人々に好まれたのだろう。



画像⑤銅版画家ダニエル・ホドヴィエツキの墓碑 (2025年6月14日筆者撮影)

第一墓地の見学を終えた我々は、連邦情報局 (BND, 旧ゲーレン機関) の厳めしい建物を左目に眺めつつ、ショセー通りを北上して右折し、リーゼン通り Liesenstraße に面した第二墓地へ12時前に到着した。墓地に入ると案内役と思しき方々から手作りのケーキが無料で提供され、我々は甘味を摘まみながら歩くという、日本では考えられないほど快活な慣行で



画像⑥フォンターネ夫妻の両墓碑 (2025年6月14日筆者撮影)

墓地を見学した。オベリスク型の墓石が立ち並ぶ緑の小道を南へ進むと、プロイセン愛国者としても知られる 19 世紀の作家テオドル・フォンターネ Theodor Fontane (1819-1898) とその妻エミーリエ・フォンターネ Emilie Fontane (旧姓ルアネ＝クンマー Ruanet-Kummer, 1824-1902) の、ホドヴィエツキのそれより質素な墓碑が仲良く並んでいた。日本語に訳された作品も複数ある作家とその妻だから、これまで紹介されてきた著名人たちのなかではやはり別格のようで、案内役の方による説明もここが一番長かった。また、妻エミーリエについてはベルリンのユグノー博物館が大会直前期に特別展を催していたため、この場所に対する注目度も高かったのである。

我々は本来の予定より遅れ、12 時半頃に第二墓地を離れた。先に来た同じ道を南下し、12 時 45 分頃に大聖堂から東側の路肩で降車した。次に向かうのは昼食会場である。

(3) 昼食 (12:30～)

昼食は教会に併設されたレストラン「フーゴ・ノッテ Hugo Notte」で摂ることになっていた。店名はドイツ語の「ユグノー Hugennott」を捩っているようだ。筆者は昼食が事前予約制であることを失念しており、同じ事情を抱えた三人の方と席をご一緒した¹¹。筆者のところには 13 時頃、綺麗に盛られた焼鮭と野菜が提供され、遂に昼食を摂ることができた。

二日目後半

(1) 第二講演 (14:30～)

長い昼休憩の後、第二講演で行事は再開された。講師のフランク＝ロタル・クロル教授 Prof. Dr. Frank-Lothar Kroll は、ケムニッツ工科大学の近現代史家である¹²。14 時半頃に始まる彼の講演の題目は「ホーエンツォレルン家の寛容 Toleranz der Hohenzollern」だった。

彼は最初、18 世紀のプロイセン、特に王都ベルリンが啓蒙主義の重要拠点だったということを、聴衆に広く共有された一般的な歴史像として挙げる。そして、啓蒙君主フリードリヒ大王の治世に生きた劇作家ゴットフリート・エフライム・レッシング Gotthold Ephraim

¹¹ お一人は改革派教会関係者の男性、もうお一人は配偶者が DHV 創立地フランクフルト・アム・マイン近郊フリードリヒスドルフ Friedrichsdorf 出身のユグノー系女性だという男性で、あとお一人はポツダム大学で 17～18 世紀ブランデンブルク＝プロイセンのユグノー系将兵たちについて論文を準備されている女性の若手研究者の方である。筆者は、自分が修士課程在籍時にこの手の研究をやろうとして、上手く行かず近代史へ転向したという過去が思い出され、懐かしくも恥ずかしくなった。

¹² この講演は、大会日程が公表されて以来、筆者が密かに注目していたものでもあった。講師のクロル教授は、CDU 所属の保守的な近現代史家アンドレアス・ヒルグラーバー Andreas Hillgruber (1925-1989) の門下生だったという経歴を持つ。„Hillgruber, Andreas* Fritz“, in: *Hessische Biografie*, https://lagis.hessen.de/de/personen/hessische-biografie/alle-eintraege/16860_hillgruber-andreas-fritz, aufgerufen am 10.04.2026. ヒルグラーバーは、第一次世界大戦開戦責任をめぐる 1960 年代に始まった「フィッシャー論争」で慎重論を示し、国民社会主義（ナチズム）の相対化をめぐる 1980 年代の「歴史家論争」では左派のハーバーマスから批判を浴びた人物だった。また比較的最近では 2021 年、クロル教授自身も旧プロイセン王／ドイツ皇帝家に当たるホーエンツォレルン家の当主ゲオルク・フリードリヒ・プリント・フォン・プロイセン (1976-) が没収された遺産の補償を求めて動き、それと関連付けられて同家のナチズムへの加担が論争的となったさい、歴史学の専門家として同家擁護の論陣を張り、論敵たちを「シュトゥーベンヤコビーナー Stubenjakobiner」（「象牙の塔に籠る急進左派」の意？）と非難したために、複数の大手メディアから批判されることもあった。

逆風の中の「寛容」

Lessing (1729-1781) とユダヤ系哲学者モーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn (1729-1789) のそれとを対照する。互いに交流があったのにもかかわらず、前者はプロイセンの「寛容」が宗教に限定されていると批判し、後者は政府による人民の保護、学芸の奨励、言論の自由などを「寛容」な統治だと称賛したという。その後に続く本論は三部構成で、まず第一部で「寛容」という概念の理論的前提、次いで第二部では「寛容」がどの分野では認められ、どの分野では認められなかったのかという実践的な側面が、そして第三部では批判的な観点から見た「寛容」の限界が語られた。



画像⑦「ホーエンツォレルン家の加護の下」との碑文が刻まれた大会堂の正面出入口上部
(2025 年 6 月 13 日筆者撮影)

全体を振り返ってみると、講演内で語られた「ホーエンツォレルン家の寛容」の事例として挙げられたのは、17 世紀以降に当時ブランデンブルク選帝侯位を占めていた同家当主がルター派から領内少数派の改革派へ改宗して以降のものだったが、重視されていたのはやはりフリードリヒ大王期である。クロル教授は大王の統治が同時代の他地域と比べて「寛容」だったと評価しつつ、「寛容」を考察するにあたっては彼の統治にとって何が重要だったかという「有意性原則 Relevanzprinzip」を問わなければならないと強調する。教授によれば、フリードリヒ大王の「寛容」は、国家を維持・統治するために必要な手段だったという。それに先立つブランデンブルク＝プロイセンの数々の宗派政策や移民政策、ユダヤ人に対する比較的温和な法的措置、繊維産業や農産物栽培などの技能を持つユグノーたちを受け入れたことも、国益を重視した戦略的な手段だったというのだ。

ただし彼は終盤、大王の「寛容」に明確な限界が二つあったと述べる。その第一は、彼の「寛容」が無秩序なものではなく、臣民全体の利益を図るという一定の方針の結果として生

まれたものであることだという。第二は、「寛容」が啓蒙思想の合理的・目的志向的な傾向の表れ、つまり単なる理想や善意ではなく国益を最優先に考える実践的な政策の一環として機能していたことだという¹³。講演は45分近くたつぷりと時間を使って行われた。

(2) 音楽礼拝 (16:00～)

講演後に15分ほどの休憩が入った後、同日午前と同じく、複数の行程が同時に展開された。今回の選択肢は三つあり、第一が学芸員の方によるユグノー博物館の案内、第二が文書係の方による教会文書室・図書室の案内（ただし参加者はDHG系譜学研究班 *das genealogisches Arbeiterkreis* に属する者に限定）、第三が大会堂での土曜定例の音楽礼拝への参列だった。筆者はすでに前週、文書係の方にご協力をいただいて文書室へ通い、教会の文書群を閲覧していたし、系譜学研究班には入っていない。それに、ここまでの行程が内容盛り沢山であり、夕方頃には体力も削れていたもので、第三の選択はちょうど良かった。



画像⑧大会堂内出入口上部に備えられたオルガン（2025年6月15日筆者撮影）

音楽礼拝はドイツ中東部のザクセン地方から来られた改革派の女性牧師補の方によって執り行われ、旧約聖書の詩編の一部に旋律を付けたいくつかの讃美歌を合唱した。45分程度の礼拝の後には、珈琲・紅茶や菓子類をいただきながら一つの机で教会関係者の方々と一時間ほど談笑した¹⁴。気が付くと18時が近づき、我々は大会堂の西側に備えられた立派なオルガンを背後に、昨夜と同じ晩餐会場へ向かう。

(3) 晩餐会 (19:00～)

¹³ この講演の最後には、司会を務めるフリック会長とクロル教授とのあいだで少し議論があった。その遣り取りのなか、教授はプロイセンを二面性のある「ヤヌスの顔」と表現し、長らく軍国主義的・権威主義的であるとして非難されてきたプロイセンの歴史にも、現代的観点からして評価されるべき良い面があることを強調した。また彼は、移民たちを共同体の利益に活用する必要がある、何も利益が引き出せないことに続ける意味はなく、ここで自身が語ったプロイセンの歴史から現代の我々も学ぶことがあるはずだと付け加えた。きわめて緊張感のある遣り取りだった。

¹⁴ 話題は、ブランデンブルクやザクセンなどドイツ東部と、オランダに近く改革派も多い東フリースラントとの教会内の雰囲気の違い、現代的な音楽を教会へ採り入れることの是非など多岐にわたったが、いずれも現代のキリスト教会が世界各地で直面している普遍的な問題を思わせるものだった。

逆風の中の「寛容」

二日目は前日より増して豪華な夕食が提供され、とりわけ通例フランス語礼拝に参加していた旧フランス領出身と思しきアフリカ系信徒の方々が、細長い米を使った料理を提供してくれた。我々は言葉を交わしながら、赤ワインとともに舌鼓を打った¹⁵。



画像⑨二日目の晚餐会で提供された料理（2025年6月14日筆者撮影）

（4）演奏会（20:15～）

今日はまだ終わらない。20時15分頃からは大会堂で演奏会があった。そこでは「ユグノー詩編歌 Hugenottenpsalter」、すなわち宗教改革者ジャン・カルヴァンの影響下で編まれたジュネーヴ詩編歌の一部を合唱する機会もあった。

演奏会が一時間弱で終わり、21時15分頃になると、参加者たちは宿や家へと帰っていった。筆者も外へ出ると、一年で最も日照時間の長い6月のベルリンの空は、まだ夕暮れ時という感じである。屋外で二次会を楽しんでいたフリック会長ら DHG および現地教会関係者一行に誘われてビールを飲みながら歓談した後、22時過ぎには宿泊先への道を歩いた。

三日目

（1）日曜礼拝（10:00～）

三日目、筆者は朝9時半頃に大会堂前へ到着した。10時から通例11時から開催される礼拝が一時間繰り上げて実施され、普段の会衆に大会参加者を加えた大勢で神を賛美することになった。最終日である三日目に現地教会の日曜礼拝へ合流するという点は、前回のバ

¹⁵ 晚餐会には、前回大会で知り合ったミヒャエル・ノイバウアー博士 Dr. Michael Neubauer とその配偶者の姿もあった。彼はドイツ・ユグノー協会の共同創設者たちの一人で第二代会長のシャルル＝ウジェヌ・コルヴォン Charles Eugène Correvo (1856-1928) の曾孫に当たる人物である。彼は第一次世界大戦の最中と戦後に独仏融和のため尽くした中立国スイス出身の曾祖父を誇りに思っており、極東から訪れた筆者のことも何かと気にかけてくれていた。

イロイト大会も同じだった。しかも、今回は独仏両言語による礼拝だ。参列者にはアフリカ系の方々も多く、礼拝中には聖歌隊による合唱もあり、大変賑やかなものだった。

(2) 大聖堂祭 (11:00～)

一時間強の礼拝が終わると、現地教会による大聖堂祭 Domfest の開幕が宣言された。フランス大聖堂を囲んで屋外にて礼拝参加者へ昼食が提供され、小さな慈善市や音楽会も展開される。これに合流するかたちで、今次のドイツ・ユグノー大会は終了する。ただし、昼食の準備に時間がかかるようだったので、先述の老婦人二人組に頼まれて素晴らしい青空の下、大聖堂を背景にした記念撮影を筆者が担当することになった。

筆者は 12 時頃に昼食会へ合流すると、緑に輝く木々の下で歓談しながら食事を楽しんだ。食事中にはアフリカ系信徒たちによって讃美歌と民族舞踊を混合したような音楽が披露され、我々の耳目を集めた。こうして宴は 15 時頃まで続くようだったが、筆者は 14 時頃に市内の別の場所で日本語礼拝があったため、13 時 15 分頃に惜しみつつそこを後にした。

おわりに

今回のドイツ・ユグノー大会には様々な要素や力学が見られた。それらのうち、筆者がここで強調しておきたいのは、ユグノーの歴史を引き合いに出して、彼らが国家や社会に有益な人材となりえたとし、これからもなりえるのだから、移民・難民受け入れには積極的であるべきだとの論法が、ある程度自然に受け入れられていることだ。しかし、筆者が本誌の別稿で述べたように、近世のプロテスタント難民を現代の難民申請者と同一視することは難しい¹⁶。また、そもそもこの論法を突き詰めれば、共同体の役に立たぬ者は、本人が困窮していたとしても切り捨てるべきだということになる。これは、前回のバイロイト大会で登壇した筆者の恩師アレクサンダー・シュンカ教授（ベルリン自由大学）がユグノー史概説書出版時に指摘していた点でもある¹⁷。移民・難民擁護論者たちは逆風のなか、対機説法として彼らの社会的有用性を語ってきたのだろうが、結局のところ共同体への貢献を求める点では程度の差こそあれ多くの排斥論者と思考が共通している。

これは、政治的立場に関係なく、歴史学が「国家」や「文明」ないし「社会」や「文化」を普遍的な全体連関と同一視し、「関係」や「価値」以前にそれ自体で苦悩しつつ躍動する「存在」としての「個」を軽視してきたという、我々の問題と関連するかもしれない。今日「宗教史」と称される、それ自体ではきわめて優れた歴史研究の数々に、教団や信仰が国家権力や一般社会とどう協力／対立したか、あるいは政治変革や福祉増進という「公益」にどれだけ役立ったかということへ説明を集中させる傾向が多く見られることも、筆者にとっては歯痒い。筆者を温かく迎えてくださった DHG や現地教会の方々は、この問題点をしっ

¹⁶ 林祐一郎「《史料紹介》フリードリヒ・ヴィルヘルム「ポツダム勅令」(1685 年)」『フェネストラ：京大西洋史学報』2, 2018 年、6 頁。

¹⁷ „Europäische Fluchtgeschichte(n). Warum es sich in Zeiten globaler Migrationsbewegungen lohnt, auf die Hugenotten zurückzublicken, erklärt der Historiker Alexander Schunka im Interview und auf dem taz lab“, in: Tageszeitung, 26.01.2019, <https://taz.de/Europaeische-Fluchtgeschichten/!5567627/>, 10.04.2026; 林祐一郎「《書評》Alexander Schunka, *Die Hugenotten. Geschichte, Religion, Kultur*」『史林』103(3), 2020 年、67 (427) 頁。

逆風の中の「寛容」

かりと見つめ直して、単なる対機説法や国家論・社会論、あるいはかつての尚古趣味にも頼らない、個性的な歴史観を提示してくれるものと信じている。それが DHG 会員としての筆者の願いであり、同時に研究者としての筆者へ課せられた大きな宿題でもある。

【付記】本稿は、松下幸之助記念志財団 2024 年度研究助成（人文科学・社会科学領域）の成果の一部である。

【謝辞】6 月という授業期間中の渡独は、筆者の非常勤先だった大谷大学文学部歴史学科教職員の方々のご理解があって実現したものである。仲介役となってくださった前田充洋先生はじめ、関係者の皆様には改めて感謝申し上げたい。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）